

## 編集後記

第1号に比べてこの第2号はきわめて順調に編集作業が進みました。これは、第1号＝創刊号のときに苦勞していただいた編集担当教員（T.Y.氏）の努力の賜物です。

ところで、第2号掲載の論文には3つの形式があります。「論文・研究ノート」は、投稿、査読の上、採用にいったもの。「研究報告」は、文学研究科教員の論文で、査読を経っていないもの。「特別寄稿」は、外国人研究者の論文や依頼原稿など、査読になじまないものです。今後は「論文・研究ノート」のいっそうの充実をはかりたいと考えています。  
（仁木 宏・編集委員長）

第1号では完全にT.Y.さんに頼り切っていたので、何もわからないままに第2号の編集担当を引き受けてしまいました。しかし、T.Y.さんが書式と作業のフォーマットをほぼ確立して下さっていたこと、出口智美さんというきわめて有能な秘書役が得られたこと、博士研究員の岸政彦さんが手伝ってくださったこと、それに編集委員、執筆者、翻訳者、原稿責任者の先生方の多大なご協力を頂いたおかげで、なんとか無事に刊行にこぎ着けることができました。みなさん、ほんとうにどうもありがとうございます。

発行間隔が短く、しかも刊行期日厳守という雑誌の特質上、第1号では電子ファイル上での校正という方法を採用したのですが、ファイルを開くソフトウェアのバージョンが違っていると仕上がりが変わってしまうという問題が生じたため、今号からはニュース記事を除いてプリントアウト原稿による著者校正に変えました。しかし、ニュース記事でも著者でなければ判断しにくい校正箇所が生じるので、将来的にはニュース記事を含めて全面的に著者校正にすることが理想と考えています。そのためには校正の締切厳守など、執筆者の先生方により一層のご協力を仰がねばなりません。どうかよろしくお願い申し上げます。  
（土）

詳細はすっかり忘れてしまいましたが、大学で発行する雑誌の編集に関わることが結構な経歴として公にも認められるお国があるとか。今回、他の方々のお仕事ぶりを見るにつけ、編集って大変！と、うろ覚えのはずの先の話に勝手に得心している次第です。私などはごく一部の仕事をお手伝いさせていただいた程度で、後記に名を連ねるのも気がひけますが、諸々の厳しい制約下にも拘らず明るい雰囲気の中で充実した紙面を作り上げていく場に居合わせる機会を戴き、本当に得難く有益な経験であったと感じています。  
（金蔵）

『都市文化の研究』とはそもそも何なのか、査読作業中、何度も自問自答を繰り返しました。その結果、おぼろげながらも、つかめてきたことは、決して特定の専門分野に偏るものではなく、実に多様なアプローチが可能であるということです。こういう土壌から、今後も、若手研究者が次々と巣立っていくのでしょうか。第2号の発刊にあたり、この現場に居合わせたことを、大変幸運であったと感じています。  
（M.I.）

I'm very happy to have been able to make a small contribution to this second issue of our magazine on aspects of urban culture. I look forward to working on future issues.  
（R.）

Cチームとの連絡窓口という役割で、新たに第2号の編集委員に加えていただきました。当初、雑誌の編集という自分にとっては全く未知の世界に、右も左もわからない状態で迷い込んだような気持ちでしたが、第1号編集時から関わっていらっしゃる諸先輩から道を示していただいたおかげで、与えられた仕事をなんとかやっけてこれたような次第です。特に、自分の研究領域とは異なる分野の諸論考の査読は、重荷ではありましたが、刺激的な経験でもありました。この仕事を与えてくださった方々に感謝するとともに、この度の経験を今後の編集作業に生かしていきたいと思えます。  
（友）

「論文・研究ノート」に掲載されている論文は、査読を受けて採録されているものです。この査読は、都市文化研究に資するものであるかという内容面の精査と、論文としての形式に関するチェックに、大別されます。また、査読には二人の研究者があたり、編集委員会が、両者による査読結果を総合的に判断して、採録の可否を決定いたします。『都市文化研究』の学術性の水準は、こうした確かな査読手続きに裏付けされているわけです。  
（T.K.）